特254
179

# 大信讃嘆

梅原眞隆述

始

特254
179

# 大信讚嘆

梅原眞隆述

顯眞學苑刊

帝國圖書館藏

大信心者則是長生不死之神方、忻淨厭穢之妙術、選擇廻向之直心、利他深廣之信樂、金剛不壞之眞心、易往無人之淨信、心光攝護之一心、希有最勝之大信、世間難信之捷徑、證大涅槃之眞因、極速圓融之白道、眞如一實之信海也。（教行信證）

# 大信讃嘆

梅原眞隆述

## 信心の嘆釋

親鸞聖人ほど信心の尊い力を體驗せられたお方はありませぬ。すべての宗教において信心は大切なものとして重視されてゐますが、それは他のものと並べて、その中で最も大切だといふのであります。ところが親鸞聖人は信心一つで完全に救はれるといふことを領得なされたのでありました。即ち、信心の外には何もいらない、信心は救はれるために大切なものゝうちのひとつではなくて、この信心ひとつで救はれ、これ以外には何も要らないと仰せられたのでありま

す。そこで、親鸞聖人の宗教に於ける信心といふことは、他の一切の宗教に於ける信心の重要性といふものと全くその意味を異にしてゐることに注意せねばなりませぬ。

おもふに親鸞聖人ほど信心の偉力を認められたお方はありませぬ、そしてこれを反顕するひとつは信に對する疑ひの罪過を意識されたことであります。聖人は二十三首の疑惑讃をかゝげて「佛智うたがふつみふかし」と誡め「已上二十三首、佛不思議の彌陀の御ちかひをうたがふつみとがをしらせんとあらせるなり」と仰せられました、また諸經讃のなかに「衆生有碍のさとりにて、無碍の佛智をうたがへば、曾婆羅頻陀羅地獄にて、多劫衆苦にしづむなり」といふ一首があります、そして曾婆羅頻陀羅地獄に「無間地獄の衆生をみて、あら樂しやと羨む地獄なり」と御左訓せられてある、これまでの通念では無間地獄は最も重罪のものゝ墮在する地獄である。然るにこの最も深刻な地獄に苦しむ罪人をみてこれを羨望するといふことは、この曾婆羅頻陀羅地獄がいかにどん底の重い地獄であるかゞうかゞはれるのであります。これによつても疑ひの罪過をいかに深刻に怖れられたかゞ拜察されます。而して疑ひの罪過を怖れられたことは信の價値を重せられたかを知るべきであります。

從つて私共は、聖人が自らその信心を讃嘆なされた御讃嘆を深く注意せねばなりませぬ。さてその信心に對する聖人の御讃嘆は、聖人の御撰述の到るところに、くりかへされてありますが、とりわけて注意すべきは御本典であります。御本典には特に信卷をひらいて、大信心の功德を讃嘆なされてあります。

その信卷の卷頭に十二句の嘆釋をなされてある一段を、こゝに頂きたいとおもふのであります。いまこの十二句の嘆釋を素描して、聖人の信心讃嘆の風光

を窺ふことにいたします。

これは、こゝろしづかに拜讀しただけでも、力強い生命の躍動を感ずることが出來るのであります。蓋し、聖人が自ら體驗あらせられた光芒陸離たる信心の趣きを、うち出して居られるからであります。

## 長生不死の神方

第一句には「長生不死の神方」と仰せられました。「神」とは「測り知られない神秘な」といふことで、「方」とは「方法」若くは「處方」といふほどの意味であります。そこで第一句の御讃嘆のこゝろは、信心はほろびない生命を享ける神秘な名方法であるといふのであります。



長生不死、卽ち亡びない生命は一切の人々が求めてやまぬものであります。もつとも、今日の人々の中には、かうした強い欲求をあざやかに心に感じないほど去勢された人々もあります。ほろびない生き方などゝ願つてもそんなことはとうてい出來ることでないから、考へてみても仕方がないことである。生きてゐるものは死んで行くより外はないとはじめから淋しく斷念してゐるかのやうであります。

またある人々はかうも考へてゐます。我々は日々生きることに追はれ通しで生きることに全力をつくしても十分に生活することの出來ないほど人生は切迫してゐるので、「死ぬこと」など考へる餘裕がない。「生」の問題に追ひつめられて「死」を問題にするいとまがない。從つて「不死」の問題などは、問題にならぬと考へてゐます。

けれどもこれはいさゝか輕卒な考へ方で、決して忠實な生活態度ではありませぬ。のがれられぬからとて、「死」はあくまで嚴かな問題として解決を要求してゐることを知らねばなりませぬ。生死流轉の業苦がせまつてくればくるほどこの生死を出離する長生不死の欲求が鋭く感ぜられてくるのが人性の自然であります。私共はごまかしたり、逃避したりせずに、忠實に人生の深い欲求について考へなくてはなりませぬ。あわたゞしい斷念によつて、深い欲求を掩うてはなりませぬ。私共は卒直にこの深い内的欲求にめざめ、如何にしてこの長生不死の欲求を充たすかを思案しなくてはなりませぬ。

また、「生」に追はれて「死」と「不死」とを考へるいとまがないといふことは慌てたものゝ考へ方であります。けだし、現實の問題は生きることだけではないからであります。生きることゝ死ぬことゝはひとつの事實であります。



「生」を問題としてゐることは、そのまゝ「死」を問題としてゐることであります。「生」は現前の問題で「死」は未來の問題であるといふことは、概念の配列にすぎないのでありまして、「生」が現前の問題であるやうに、「死」もまた現前の問題であります。

そこで死を解決することが生の解決の根本でなくてはなりませぬ。生死巖頭に立つといふことは臨終に局ることでなくて、私共は誰れもかれも今、生死巖頭に立つてゐるのであります。

かく考へる時、何れにしても「死」の問題をおごそかに取り扱つてゐない人々は、人生に對して忠實な人々とは言へないのであります。

長生不死の念願こそは、人生に於ける最高の欲求であり一切の欲求をまとめた全一のものであります。だから、この願ひにしづかにめざめることこそ、人

生に對する正しき開眼でありませう。そしてかゝる深い願ひにめざめ、つき動かされさめた時、宗教は人生に何を與へんとしてゐるかゞ、はつきり肯かれることでありませう。

然らば、いづこにこの長生不死の神方が存するか。これを靈藥に求め、魔呪の力を借ることは全然誤りであります。私共の肉體の現身をこのまゝ永久に保存することは到底不可能であります。

そこで道はたゞ一つであります。所詮生死流轉の業苦は嚴かな約束であつてどうすることも出來ぬのですから、この生死を越えて躍動する力をうけ取る外はありませぬ。死をさけて生きることでなく、死を透して生きることを覺悟しなくてはなりませぬ。この力こそ「かぎりなき生命」と名告したまふ阿彌陀佛の靈能であらせられます。かぎられたるいのちゆゑに、むなしく亡びゆく一切衆生に、かぎりなき生命をめぐみたまふことこそ、我等を救はんための大悲の根本であらせられます。

われらはこの南無阿彌陀佛のめぐみを全領することこそ、ほろびざる長生不死の救ひを得るたゞ一つの道であります。

かぎりなき生命のめぐみを領納すること、卽ち、南無阿彌陀佛を信ずることが、亡びない生命によつて法界と共に活きることであります。そこで信心は、「長生不死の神方」であると仰せられたのであります。

この「長生不死」の生き方は實に、人生の最後の場合に殘しておくべきいとなみでなくて、人生の最初の踏出しにあたつて第一に決定せらるべき基本的工夫であります。この人生は滅びゆく生存にもがくのでなくて、亡びない生命の發現として一歩々々生き拔くところに、法界輪に逍遙するところの法喜が體得

されるわけであります。

## 忻淨厭穢の妙術

第二句には「忻淨厭穢の妙術」と讃嘆せられてあります。「淨」とは淨土、「穢」とは穢土の略でありまして、「忻」とは忻ひ求めること、「厭」とは厭ひ離れんとすることであります。そこで「忻淨厭穢」といふことは、清淨な佛土に往生したいとあこがれもとめて、むさくるしく穢れた現前の人生を離れんとするめざめた生き方であります。そして「妙術」とは「いふにいはれぬ不思議なみち」といふ意味であります。

さて、信心が「忻淨厭穢の妙術」であるといふことは、この信心が往生淨土



の正因となることを示されたのであります。信心は單に五十年の人生を彌縫して生きる力でなくて、永遠の淨土を要期して人生を解決するものであります。これが轉迷開悟を目標とする佛敎の深い生き方であります。

現前の人生を穢土と觀ずるは、人間の自己の穢れに對する深き内的反省を示すのであります。理想の淨土を彼岸に仰ぐは、至高の價値生活に對する人間の嚴肅なるめざめを示すのであります。かくて淨土を忻求する心、穢土を厭離する心こそは、めざめたる人間が高い價値を見届けてこれを實踐せんとする尊い生き方を示してゐるのであります。

故に、忻厭の思想は決して不必要な暗い人生觀でもなければ、現實を輕視して未來の幻影に醉ふ阿片の如きものでもありませぬ。乃ち聖なる光によつておごそかにめざめさせられたものが、その聖なる價値意識に照して現實世界をあ

るがまゝに見直したものである、それであればこそ、厭ふべきものを厭ひつゝ聖なる力をつかんで、この人生を最高のものにまで高めんと生き生きと動いて行く相であります。そして、穢を厭ふ心はそのまゝ浄を忻ふ心であり、浄を忻ふ心はそのまゝ穢を厭ふ心でありますから、現前の境界を穢土とすることは、人生の價値を割引して消極的に萎縮することでなく、より高い價値を發見して人生を高めんとする力素となるのであります。忻厭の行人こそ最も眞面目に力強く人生を切りひらく人であることを知らねばなりませぬ。

無論、私共凡夫はこの尊い忻浄の心を持ちえない悲しい存在でありますからこの忻浄の心を、往生の條件として私共の上に課せられて居るのでは有りませぬ。然し如來の御廻向したまふ信心が、私共の智慧の眼となつて下さるので、そこに自ら忻厭の尊い生き方がほのかに示唆されてくるのであります。



そこで、この智慧の開眼によつて、われらの價値觀が内面的に一轉回を來たします。

愛慾と名利によつてのみ、人生を左右せず毀譽と褒貶によつてのみ生きる方向をえらばずに、何れの道がお浄土に通ずるかを内省して生きることは、自然な法喜であります。われら愛慾名利の凡夫の生活にかゝる尊い方向の與へられることは全く信心の功德のあらはれであります。そこで信心は「忻浄厭穢の妙術」であると仰せられた次第であります。

## 選擇廻向の直心

第三句には「選擇回向の直心」と讃嘆されてあります。こゝに「選擇」とい

ひ「廻向」といふは、共にこれ南無阿彌陀佛といふ本願の名號をたゝへたてまつつたものであります。

それでは、南無阿彌陀佛の名號を、何故に選擇の行と呼ばれたかと申しますと、この名號は如來がわれら凡夫を救ふためにお選びになつた大行であるからであります。南無阿彌陀佛の嘉號には勝易の二德、卽ち「勝れてゐる」といふことゝ、「修し易い」といふことが具備してゐるために、法藏菩薩がわれら凡夫往生の行としておえらび下さつたのであります。

凡夫の盲目的な本能によつて欲求する價値よりも、めざめたる如來の慧眼によつて見定められた價値は勝れてをります。凡夫の不完全な理性によつて選び分ける値打よりも佛の願念によつて選ばれた値打は光つてをります。それは凡夫の探し求めた相對價値ではなくして、如來のみ手によつてえらびとられた絶



對價値だからであります。

如來の選擇せられたものが、役に立つといふことは、凡夫の我執をはなれてもつと高い立場で本當によいものを選んで下さるからであります。如來は悲智圓滿なお方であります。だから私が私に觸れてゐるよりも如來はもつと深く私に觸れてゐて下さいます。私が私のことを案ずるより、如來はもつと強く私を案じたまふのであります。子を知ること親に如かず。子供が自分を考へるより母親はもつと〳〵深く子供のことを考へ、まごゝろこめてよいものを選んで與へるのであります。

かうしたことを考へるにつけても、この「選擇」といふおいわれが愈々有難く、そして親しみ深くいたゞかれるのであります。

次に「廻向」とは「廻施」又は「施與」といふことで、換言せば、それは「お

めぐみ」であり、「おあたへもの」であります。卽ち南無阿彌陀佛は佛のおめぐみであり、おあたへものであるといふ意味であります。そして如來が南無阿彌陀佛の名號をわれら凡夫に與へたまふといふことは、如來が自分御自身をわれらにおめぐみになるといふことであります。「愛は惜みなく與ふ」といふことがありますが、自分自らの生命を與へたまふ名號の廻向ほど徹底した慈愛のすがたはありますまい。かくて如來は自ら凡夫のものとなり切つて、卽ち凡夫の信心となつて凡夫を救ひたまふのであります。

さて、この名號が如來の選擇であるといふことは法然上人のすぐれた開顯でありました。そしてさらにその名號が如來の廻向であるといふことは、親鸞聖人の力强く顯彰せられたところであります。法然上人と親鸞聖人の一致した御化導により、如來の生命がわれらの生命として、親しく領納るやうになつたの



であります。

終に「直心」とは正直といふこゝろであります。他力の信心は正直の心でありまして、邪僞のこゝろ、諂曲のこゝろをはなれて居ります。そこで、この信心のことを「直心」であると讃へられたのであります。

この直心は本願の名號に信順するこゝろであります。「汝一心正念にして直ちに來れ」といふ如來招喚のお喚聲をそのまゝうけて、疑ひなく慮なく直進するのが凡夫「直入」の信心であります。そしてこの直心こそ人生に於ける最も高次的な正道を進み行く心構が示されてあるわけであります。

## 利他深廣の信樂

第四句には「利他深廣の信樂」といふ讃嘆なされてあります。

まづ「利他」といふことは、親鸞聖人の御見解では「他力」の意味でありま す。ほとけがわれらを利益したまふ、卽ちわれらを救ひたまふことを積極的に表現したものと理解して、他力とお味ひになつたものであります。この他力の廻向による信心でありますから「利他の信樂」といふのであります。さて「他力」といへば、何か外部的な、超越的な存在のやうに一般に考へられ易いのでありますが、聖人はこれを內在的に味つて、信心を他力の廻向であると御覽になりました。こゝに趣深い眞宗の特徵があるのであります。

次に「深廣」とは深くして廣いといふことであります。この信心は佛智が惠まれたものでありますから「深廣の信心」といふのであります。如來の智慧は深くして廣いからであります。「如來の智慧海は深廣にして涯底なし」と仰せられてあります。信卷には「この心、廣大にして法界に周徧せむ。此の心長遠にして未來際を盡す」とあります。廣大にして十方にゆきわたり、深遠にして三世を貫くものが佛智であります、この佛智の功德を全領した信心であるからそのまゝ信心の功德と讃嘆あらせられたのであります。

終に「信樂」とは樂もしく疑ひ晴れるといふことであります。これはいかにも佛に親しみを持つふくやかな貌でであり。充された生命の姿であります。信心を信樂といふことは、第十八願に明瞭に示されたところであります。

第十八願に往生の大道を示して「至心信樂」と「欲生我國」と「乃至十念」といふ三つを示されてあります。そしてこれは序次のごとく、「信」と「願」と「行」でありまして、成佛の三資糧を示されたものであります。しかるに、このうち機受は「信」のひとつでありまして、「願」は「信」の義別であり「行」

は「信」の相續であります、そこで、第十八願は信ずるひとつで救はれる唯信の大道を誓約されたものであると窺ふべきであります、さらにその「信」も如來のまごゝろが到りといゞてくださるのであるから「至心」といふ眞實の佛心が信の本質であることを示し、さらにこの信は人生の至奥至深の聖求を圓かに充たすものであるから「信樂」と表詮された次第であります。

これを要するに「利他深廣の信樂」とは他力廻向の佛智を内德とする信心といふことであります。葉末の露にうつる月はさゝやかなれども、眞如の月そのものは常に四天下を照らしてをります。われらの機相にあらはれた信心はさゝやかであつてもその體は佛智でありますから無明の闇を破ることによつて、迷を轉じて悟りを開くことが出來るのであります。そしてこの黑闇を破るものは智慧の光明であります。かゝるかゞやかしい如來の眞實の智慧の凡夫にめぐまれたのが「信心の智慧」であり、「智慧の念佛」であります。われらはこの「めぐまれた智慧」によつてのみ轉迷開悟といふ究竟の目的を達成することが出來るのであります。

## 金剛不壞の眞心

第五句の嘆釋は「金剛不壞の眞心」といふのであります。

「金剛」といふことは金剛石のことでありまして、一般に尊重される財寶でありますが、印度においては轉輪聖王の七寶のひとつに數へられることになつて殊に重んぜられることになり、佛敎においても聖なる價値を表象するやうになつたのであります。

そして、道の元となり功德の母となる信心を金剛にたとへることになりまし

た。華嚴經に「深心は金剛の如し、信心は壞すべからず」と說かれたことをみてもわかります。淨土敎においても善導大師はしきりに金剛によつて信心の德義をたゝへられました。

さて、佛敎においては金剛にいろいろさまざまの德義を象徵されましたが、試みに大乘義章によると十四の德義を列擧されてある。すなはち、能破の德、清淨の德、體堅の德、最勝の德、難測の德、難得の德、勢力の德、能照の德、不定の德、主たる德、能集の德、能益の德、莊嚴の德、無分別の德であります。いまこゝに「不壞」をかゝげてあるのは十四の德義のうちでは體堅の德からひらいたものであります、金剛石の地質が堅牢であつて何ものによつても破壞されないことを示されたものであります。

淨土敎の啓拓者であらせられた善導大師は淨土敎があらゆる立場の人々から論難され破斥されたけれども、寸分の動亂もなされず、また破壞もされない權威のあることをたゝへて「金剛堅固の信心」とのべ「此の心深く信ずること由し金剛の若し、一切の異學異見別解別行の人等のために動亂破壞せられず」と仰せられました。

いま親鸞聖人が「金剛不壞の眞心」とたゝへられたことも、善導大師とひとしくあらゆる謗難と迫害のなかにいよ〳〵强く、いよ〳〵うるはしくかゞやく信心の權威にうたれられたことゝ察せられます。つまり、確信といふものゝ權威をたゝへられたのが、この一句であります。

さらに、順境にも溺れず、逆境にも行つまらず、無碍に生き拔く信心の威力をもこの一句に味ふことができます。

ほゝゑみにかゞやくいのちなみだにも

くもらぬいのちたゝへまつらむ

これはふるい拙詠のひとつでありますが、この信心のいのちをたゝへたものであります。

なほ、かゝる金剛石のやうな信心は凡夫の手によつて技巧され支へられるのでなくて、全く如來の眞實心がいたりとゞいてくださるからであります。そこで「眞心」と仰せられたのであります。「眞心」とは「眞實心」のことである、「眞實心」とは如來心のことであります。

土くれにもひとしいわれらの凡夫、何らの値打のない凡夫の生活のたゞなかに、泣いて笑つてもくもらない聖なる生命がめぐまれて、金剛石のやうに、いつも美しく燦として光つてゐてくださることは、洵にありがたいかぎりであります。



## 易往無人の淨信

第六句の嘆釋は「易往無人の淨信」といふのであります。

「易往」といふは「往き易い」といふことでありまして、彌陀の淨土はすべての人々が往生しやすく成就されてあることを意味するのであります。彌陀の淨土はわれら凡夫の知目行足を運んで往生するのでなくて如來からめぐまれる大信大行によつて往生させていたゞくからであります。つまり他力廻向の往生であつて、秋毫も凡夫のはからひを須ゐないから往き易いのであります。

ところが、この他力の救ひといふことは因襲的な宗教とは全くその趣を異にしたところであり、卓越せるところであるために、久しく自力の機執にとら

はれた人々には如實に領解することができないために「往き易くして人なし」といふことになりました。お淨土の門はいつも開いてゐるが、凡夫の眼はいつも閉されてゐる皮肉なありさまであります。この凡夫自力にて往生されないところが、他力信心の尊高を反顯することになります。

そこで、「易往」は順顯し、「無人」は逆顯する、表詮には順逆の相違がありますけれども、これは共に他力信心の卓越せる尊高性をあらはすのであります。

かくて他力すなはち佛力の廻施された信心であるから、「淨心」と仰せられたのであります、「淨心」とは「清淨心」の略である、「清淨心」は「如來心」であります。

つまりわれらの救はれて行く生命道は全く如來の力のめぐまれたものであることを示された次第であります。

## 心光攝護の一心

第七句の嘆釋には「心光攝護の一心」とたゝへられてあります。

「一心」といふことは、疑ひのはれた信心を意味するのであります。「一」とは「無二」すなはち「無疑」であるから、「一心」とは「無疑心」のことであります。そこで信卷には「疑蓋無雜」と仰せられました、そして、本願文のうへには至心と信樂と欲生といふ三心を誓はせられてありますが、この三心はそのまゝ佛にまかせきる一心であります、これによつて天親菩薩は歸命の一心であると申されました。佛とわれとがひとつになりきつた歸依の風光をあらはすものであります。

この一心は佛にまかせきつたこゝろであると申しましたが、この佛にまかせきるこゝろは攝めとつてすてたまはぬ佛心に由るものであります。これを具現して「心光攝護」と仰せられたのであります。心光とは大慈大悲の佛心の顯現であつて、觀經には「一一の光明、あまねく十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず」と說かれてあります、親鸞聖人は尊號眞像銘文に「まことの信心ある人をば、常に照したまふとなり。てらすといふは、かの佛心光に攝めとりたまふとなり、佛心光はすなはち阿彌陀佛の御こゝろに攝めとりたまふとしるべし」と釋せられました。

信心の行人は佛心の攝護にあづかるのである。さらに切りつめて云へば佛心の攝護にあづかればこそ、たしかな信心がかためられるのである。これによつて親鸞聖人は唯信鈔文意に「無碍光佛の心中に攝め取りたまふゆゑに金剛の信心となるなり」と仰せられました。



これは要するに、手強い佛の御手に抱かれることによつて、われらはすべてのはからひをはなれて信任することができるのであります。さながら、母の慈愛の優しい腕に擁せられた幼童が、兩手はなしてよろこんでゐるやうな風情であります。

さらに、この「攝護」といふことは攝取と護念といふことでありますが、いづれもありがたいお慈悲の觸手であります。「攝取」とは「おさめとる」といふことでありまして、そのありさまは逃げてゆくものを追うて抱きたまふ貌であると聖人は感佩なされました。逃げてもすてたまはぬ慈愛の深さは御勿體ないかぎりであります。

また「護念」といふは、如來がいつもおもひつめておまもりくださることで

あります。かの魚の卵が水のなかにあつても決して腐らないのは、その魚母の念ずる力によるものであると智度論にのべてあります。煩悩づくめのわれらの内にあつて、なほ金剛石のやうに信心の光るのはこれ全く佛の御念力によるものであります。

われらは佛を忘れても佛が忘れたまはずに念じてくだされてある。われらは佛から逃げるときがあつても佛は追ひかけて攝めとつてくださるのである。佛に護られ、佛に念ぜられてわれらは救はれて行くのであります。

天地にさからふこゝろうらさびし
さびしきまゝに護られてあり

これはかつて、私が心光攝護の味ひ、現生護念の増上縁の手強さをたゝへて口ずさんだ一首であります。



## 希有最勝の大信

第八句の嘆釋には「希有最勝の大信」と仰せられました。

おもふに、われらは土くれにも等しい凡夫であります。そこには何等の取柄もなく、また何等の値打もない、ちつぽけな且つあはれな存在であります。けれども、このあはれな凡夫もひとたび聖なる生命をめぐまれ、聖なる光明にそだてらるゝとき、うるはしい存在として且つ勝れた存在として轉化され純化されるのであります。崑崙山の徳によつて瓦礫も轉じて黄金となるやうな風情であります。

觀經には信心の行人をたゝへられて「是人を名けて芬陀利華となす」と說か

れてあります。芬陀利華といふは夢のやうに水に浮べる白蓮の華であつて、この地上において最も美しいものゝひとつであります。

この觀經の讃詞を釋して、善導大師は五種の嘉譽をもつてせられました。その五種の嘉譽といふのは好人、妙好人、上々人、希有人、最勝人といふのであります。

いまこゝには、この善導大師の嘉譽をうけついで、「希有最勝の大信」と仰せられたのであります。大信心をめぐまれた行人は、この地上において希有の存在であり、最勝の存在であることをたゝへられたのであります。

この過分の嘉譽をおもふとき、われらは新しい覺醒と新しい感激とをもつて更生しなくてはなりませぬ。この嘉譽をきくにつけても、めぐまれた生命のいかに尊いものであるかといふことを深く氣づかねばなりませぬ。そしてこの「めぐみ」を力のあらんかぎり如實に培ふことが、何よりも大きな報謝でなくてはなりませぬ。

そして、このすぐれた權威は斷じてほこるべきことでなくて、こゝろから感戴すべきことであります。單に私やそのものゝ權威ではなくて佛のものとしての私に賦與せられた權威であります。「私の私」として自重することより、さらに一段たかめて「佛の私」として自重すべきことであります。

## 世間難信の捷徑

第九句には「世間難信の捷徑」と申されてあります。「捷徑」といふのは「近路」のことである、すなはちこの信心は世のなかに希有な成佛の近路であると

いふ意味であります。

これまでの佛教のあたりまへの規定からいたしますと、菩薩が五十二段の階梯を一段づゝのぼつて、信、解、行を圓かにみがきあげて最後に佛果を成就するのであります。そして、これがためには三僧祇百大劫を經過するといふのであります。然るに、この唯信得脱の大道においては、たゞ信ずる一念に、凡夫が直ちに淨土に往生して、其儘佛果を成就するのであります。これは驚嘆すべき捷徑で、かゝる「捷徑」は此までの世間の通念によつては理解することのできない程の希有にして類例のない近路であります。そこで「世間難信の捷徑」と讃へられた所以であります。

この佛に成ることの疾いと遲いといふことは、宗教の値打を識別する重要な尺度となりました。古來の教判に漸教と頓教とを分別して、その教の高下を分



つたのはこれが爲であります。この點に於て眞宗は「頓極頓速」の教であることを、親鸞聖人も力强く闡明なされた次第であります。

さて凡夫が信心ひとつによつて成佛するといふ、驚嘆すべき聖化は他力卽ち佛力のすべてが惜しみなく廻施せらるゝからであります。更に、くだいて申せば凡夫が其儘成佛するといふ事實の半面には佛が凡夫に下りて救ひ給ふ限りなき救ひが働いてくださるからであります。いよ〳〵佛恩の廣大にして極まりなきことを感佩いたさねばなりませぬ。

## 證大涅槃の眞因

第十句には「證大涅槃の眞因」と申されてあります。信心は大涅槃を證る眞

實の因法であるといふ讃嘆であります。

大涅槃といふのはマハーパリニルヴーナといふ梵語を云ひあらはされたもので、「大」といふ一字を附せられたのは「大」と「多」と「勝」の三義を具備した涅槃といふこと、大乘佛教の開顯せる活動性を帶びた佛果でありまして、かの灰身滅智の消極的なさとりに簡んだのであります。

この「證大涅槃の眞因」といふことは信心はたゞ淨土に往生するための因にとゞまらず、佛果を成就する因であることを開顯せられた次第であります、そしてこれは親鸞聖人の古今にすぐれた御己證であるのであります。

もと、佛教の究竟的目標は成佛であります、然るにこの娑婆において成佛の行願を完全することができないので、修道の環境としてふさはしい淨土に往生して然る上において成佛の行願を仕上げんと工夫したのであります。こゝにお



いて佛教には往生教と成佛教とが分別されました。そしてこのときは往生教は成佛教の前程として意味づけられるにすぎないものであると考へられ、往生教たる淨土門は成佛教たる聖道門に從屬してゐたのであります。然るにわが聖人は成佛の願行は佛から廻向せらるゝので、現生に於ける信心の一念に成佛の願行が成就する。從つて淨土に往生して然る後に更に願行を累積する必要はない、淨土に往生すると同時に佛果を成就するのであると道破せられたのであります。こゝに於て信心一つによつて成佛するといふ己證を開示され、他力廻向の信心を領納することが佛教の無上の極果をさとる唯一の大道であることを明かにし、他力の救ひをとく眞宗は誓願一佛乘卽ち、惠まれた最高の宗教であることを示されたのであります。

そして、これは大經の異譯たる如來會に「彼國の衆生、若し當に生るべきも

のは、みな悉く無上菩提を究竟し、涅槃處に到らん」といふ大聖の眞言をみがきあげられた御己證であります。

われらはめぐまれた聖なるいのち、卽ち一念の信心はいかに尊いものであるか、いかに有難い生命力であるかを、ふかく感佩して、この聖なるいのちを大切に培はねばなりませぬ。

## 極速圓融の白道

第十一句には「極速圓融の白道」と申されてあります。

「白道」といふのは汚れない道といふこと、「白」は汚染なき清淨眞實のまことを表したまふもの「道」は淨土に到るみち、佛果に登るみちでありまして、かの有名な善導大師の釋顯なされた二河白道の譬喩には他力廻向の信心が白道であつて、この白道は貪瞋の水にも腐らず、瞋恚の火にも燒けないことを顯されてあります。つまり、煩惱づくめの凡夫の中に與へられて汚れない信の威力を示されたものであります。「三毒の煩惱はしばしば起れども眞實の信心はかれらにも碍へられず」といふ風情を示されたものであります。

この信心は廻向されるのであるから、何等加工する時間を要しない、頂いた一念に完全するから「極速」といひ、又この信心は廻向であるから、佛力がそのまゝわれらのものとなつてくださるから「圓融」とたゝへられた次第であります。

一代佛教の根本法輪である華嚴經の妙趣は圓融無碍の法門に存することであります。いまその華嚴の妙趣がこの他力廻向の信心において具現せられてある

ことをたゝへられたものであります。

## 眞如一實の信海

最後の第十二句には「眞如一實の信海」と申されてあります。

「眞如」といふは「眞實如常」といふことであつて、法性のありのまゝの自爾の風光であります、この眞如は唯一の眞實であり、諸法の本體であるから「一實」といふのでまうされたのであります、この理を極め實を盡した絶對無二の功德たる名號を全領した信心であるから「眞如一實の信海」とたゝへられたのであります。「信海」とは信心を大寶海にたとへられたのであります。

聖人は一念多念證文に「眞實功德とまうすは名號なり、一實眞如の妙理、圓



滿せるが故に大寶海にたとへたり。實眞如とまうすは無上涅槃なり」と釋せられました、そして、一代佛教の終歸たる涅槃經の要諦は「眞如一實」であります。この涅槃經の本質たる眞如一實の大法がこの他力廻向の信心に體現されてあることをたゝへられたものであります。

おもふに、第十一句は華嚴經により、第十二句は涅槃經によりて大信心をたゝへられてある、そして華嚴經と涅槃經は一代佛教の始終である。この一代佛教の始終をもつて、めぐまれた大信心を讃嘆せられたことは、信ずるひとつで救はれるといふ唯信得脫のことわりこそ一代佛教の宗要であることを示されたのであります。

われらは惠まれた信心は佛力の全現であることを伺へば、たゞ聞く處を慶び獲る處を嘆じなくてはなりませぬ。

昭和十五年四月二十日 印刷
昭和十五年四月廿七日 發行

著者 梅原眞隆

發行者 京都市上京區小山西元町四一 顯眞學苑出版部代表 木下靖夫

印刷者 京都市下京區壬生川通五條下ル 同朋舍

大信讃嘆
定價參拾錢
送料參錢

不許複製

發行所 京都市上京區小山西元町四一 顯眞學苑出版部
振替京都一四八七一番
電話西陣四六六八番

梅原眞隆隨筆集

## 隨筆雜抄 點描

定價貳圓
送料拾錢

この一篇は著者が米布の旅より歸つてから、東山を去るまでの二年間にものせる隨筆を蒐錄せるもの、各篇を通じて人生觀、社會觀、宗教觀等筆者獨自のペンが光つてゐる。

—佐賀の聖跡、吉崎の追憶、清規と逆緣、名士の蹉跌、八雪の感觸、眞理への思慕、蕉風抄、散華抄、雨奇晴好、其他—

## 隨筆論集 洛北抄

定價壹圓參拾錢
送料六錢

本書は、著者がその居を東山から洛北に移してより、大朝、大毎、報知の諸紙にかいた隨想、短章を蒐めたものである。その精緻なる觀察、潤達なる筆法は、必ずや讀む者をして飽かしめないであらう。

—禍を福に轉ずる、社會に還元する、麗人の足跡、護國の正法、背私向公の秋、古い殼と新しい芽生、聖戰と宣撫、其他—

京都市上京區小山西元町四一 道發行所 電話京都六五一九番

## 修道叢書

| | | | |
|---|---|---|---|
| 梅原眞隆著 | 正信偈十講 | ・五〇 | ・〇六 |
| 梅原眞隆著 | 眞宗の教義と實踐 | ・五〇 | ・〇六 |
| 高千穗徹乘著 | 高僧和讃 | ・五〇 | ・〇六 |
| 梅原眞隆著 | 聖典講話（續） | ・五〇 | ・〇六 |
| 梅原眞隆著 | 聖教講讃 | ・五〇 | ・〇六 |
| 荻生隆三著 | 本願嘆釋 | ・五〇 | ・〇六 |
| 梅原眞隆著 | 報恩講式講話 | ・五〇 | ・〇六 |
| 佐藤眞道著 | 横川の聖者 | ・五〇 | ・〇六 |
| 大原性實著 | 領解文十講 | ・五〇 | ・〇六 |
| 泉道雄著 | 明るい家庭 | 一・〇〇 | ・〇九 |
| 藤枝昌道著 | 嘆德文講讃 | ・四〇 | ・〇三 |

京都市上京區小山西元町四一
顯眞學苑出版部
振替京都一四八七一番

## 道の叢書

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 永井哲二著 | マルクスより佛陀へ | ・二〇 | ・〇三 |
| 2 田原優著 | 牢獄を拜する心 | ・三〇 | ・〇三 |
| 3 山本晋著 | この道の | 一・〇〇 | ・〇六 |
| 4 永井哲二著 | 轉向問題 | ・二〇 | ・〇三 |
| 5 梅原眞隆著 | 生命の糧 | ・一〇 | ・〇三 |
| 6 梅原眞隆著 | 昔物語新釋 | ・一五 | ・〇三 |
| 7 梅原眞隆著 | 榮玄記新釋 | ・二〇 | ・〇三 |
| 8 梅原眞隆著 | 凡人道 | ・一五 | ・〇三 |
| 9 梅原眞隆著 | 奉公の大道 | ・一五 | ・〇三 |
| 10 高原憲著 | 水の味 | ・三〇 | ・〇三 |
| 11 伊戸一夫著 | 劍岳 | ・二五 | ・〇三 |

京都市上京區小山上花ノ木町一七
道發行所
振替京都六五一九番

祖聖鑽仰の双璧

梅原眞隆著

## 報恩講式講話

定價五拾錢
送料六錢

覺如上人の報恩講式と存覺上人の嘆德文とは親鸞聖人の御恩德を讃嘆する典型的な表白の書である。これ等は管にちいさな型の概念を說くものではない。國民生活の源底として、あらゆる方面に擴充さるべき切々たる生命それ自身の表示である。感恩報謝の眞の姿、而してその原動力たる基底は何であるか。この二著はこれを物語りつゝ大きな法界の攝理の中に萬人を參徹せしめる。

藤枝昌道著

## 嘆德文講讃

定價參拾錢
送料參錢

京都市上京區小山國元町四一一四　顯眞學苑出版部　振替京都一四八七一番

398
341

終